洋上アルプス

No.250　平成28年1月5日

発行
林野庁屋久島森林生態系保全センター

バックナンバーや屋久島国有林における入林許可申請等様式のダウンロードはこちらにあります
http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/yakusima_hozen_c/

鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦1577-1
TEL0997-42-0331　FAX0997-42-0333

年頭所感

永田岳から展望した宮之浦岳

持続可能な開発（発展）について

屋久島森林管理署
署長　樋口（ひぐち）　浩（ひろし）

新年、明けましておめでとうございます。昨年、皆様から屋久島森林管理署に対していただいた、ご支援・ご協力に感謝申し上げます。

さて、年の初めに、改めて持続可能な開発ということについて考えてみたいと思います。昨年屋久島では、50年に一度の大規模な土石流災害が発生しました。最近は、日本国内各地でも大きな災害が頻発しています。これらの大きな要因として、地球温暖化が指摘されています。温暖化は、経済活動の拡大による化石燃料の利用、大量消費社会の結果と言われます。昨年暮れ、パリで開かれた国連気候変動会議ＣＯＰ21は、先進国、途上国等各国間の激しい駆け引きの中、最終的に長期目標や資金援助などで大きな前進がありました。唐突ですが、人は何のために生きるのかを考えた時、時代も国も違う二人の人物の生き方を思い浮かべます。一人は、日本の賢人、清貧の思想で有名な良寛さん。狭い庵の中で生活し、頭陀袋に三升の米と土間に一束の柴があればそれで十分足りるとし、必要最小限の生活に生きた人。もう一人は、２０１２年の「国連持続可能な開発会議」でスピーチをしたウルグアイのムヒカ元大統領です。スピーチの要約は「…私たちは幸福になるために生まれてきた。人生ほど貴重なものはない。昔の思想家の言葉から「貧しい人は、少ししか持っていない人でなく、いくらあっても満足しない人のことだ。」消費社会は悪循環に陥る。見直すべきは、その生活様式である。発展は、人間の幸福、地上の愛…基本的必需品を持つことに寄与しなければならないものだ。幸福こそ最も大切な宝だ。」と。共に自ら必要最小限の生活を実践し、それで十分な幸福感に満たされていました。

彼らの生き方をまねすることは到底出来そうにないのですが、二人の精神や生き方には共感するものがあります。

各機関と協力・連携を！

屋久島森林生態系
保全センター
所長　山下（やました）　義治（よしはる）

明けましておめでとうございます。

昨年は、屋久島森林生態系保全センターの業務に対しましてご支援・ご協力を賜り、心から感謝申し上げます。

さて、昨年当センターでは大学等の屋久島における現地学習や研修に伴う講義及び各種団体等の視察を数多く受け入れました。世界自然遺産地域や森林生態系保護地域を含む屋久島の森林生態系の保全・保護及び適正な利用等の当センター業務が各方面から注目を集めているからと考えます。特に昨年度は、「奄美・琉球世界自然遺産」登録を目指し取り組みが進められている沖縄県の職員や沖縄本島北部のやんばる地域の行政担当者、やんばる地域で活動する各種ワーキンググループの方々が来所されました。

世界自然遺産地域登録を契機に登山者が増加した屋久島において当センターが実施している森林生態系モニタリング調査、希少種の保護対策、外来種対策、世界遺産地域等の巡視活動、レクリエーションの森保護管理協議会の取り組みとの連携、バッファゾーンの施設整備等の業務が、今後入林者が増加する事が予想されるやんばる地域の森林生態系の保全と利用を図るうえでの参考事例として評価いただきました。また、大学等の要請に基づき実施した講義についても継続した対応の要望が寄せられています。

この事を踏まえ今後とも業務の継続性を維持し、各機関との協力・連携を図り、現状把握に努め、新たな取り組みの検討を行い、屋久島の森林生態系の保全・保護に向けた業務を遂行する事とします。

本年も皆様にとって幸多き素晴らしい年になることを祈念申し上げ年頭の挨拶とさせていただきます。

2015 屋久島森林生態系保全センターの活動　－トピックス－

広島大学大学院生 エコツーリズムと観光の発展に学ぶ

「広島大学科学研究科 21 世紀プロジェクト」の一環として調査に訪れた広島大学の国際色豊かな大学院生、教授他７名を受け入れました。

屋久島高校生 ～ヤクシカを学ぶ～

屋久島高校環境コース３年生がヤクシカに関する研究のため来所。当センター職員の説明に、今後も研究を進めていきたいと意気込んでいました。

口永良部島新岳噴火、屋久島植生影響調査プロットを設定

新岳の噴火で、屋久島にも広範囲に火山灰が降り、当センターでは６箇所の調査プロットを設置し森林生態系の影響について観察することとしました。

屋久島高校１年生「宮之浦岳登山」挑戦!～センター職員が登山安全指導～

屋久島高校からの依頼を受け、当センター職員が、登山で想定される危険や対処法、また簡易トイレの利用方法等の事前指導を行いました。

夏休み森林パトロール

夏休み期間は登山者が多くなることから、森林パトロールを行い登山者への安全の呼びかけや指導、危険箇所の点検などを行いました。

平成27年度第1回屋久島世界遺産地域科学委員会を開催

平成 27 年度屋久島世界遺産地域科学委員会とヤクシカワーキンググループ合同会議が屋久島環境文化村センターレクチャー室において開催されました。

夏休み親子森林教室を開催!!!!

ヤクスギランドにて 11 家族 30 名が参加し、好奇心旺盛な子供たちが元気にインストラクターに質問する姿が多く見られました。

白谷雲水峡3団体が 清掃ボランティア

(株)伊藤園、環境文化財団、レク森協議会の総勢 14 名が入口小道から飛流橋までの間を清掃し、園内は見違えるほど綺麗になりました。

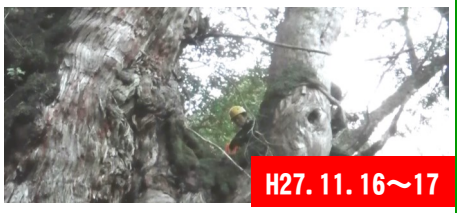
大分舞鶴高校生徒が植生調査を体験

宮之浦嶽国有林 224 林班外で、生徒 14 名が今年で３回目となる植生調査を体験し、プロット内の樹木の位置、樹高及び直径などを計測しました。

「やんばる森林ツーリズム」実施 ワーキンググループが屋久島視察

沖縄本島北部、山原地域３村の 15 名が、平成 27 ～ 29 年度に実施する「やんばる型森林ツーリズム推進体制構築事業」達成のため、屋久島へ視察に訪れました。

縄文杉ケーブリング点検実施



東側大枝付け根の腐朽による、枝の折損・落下を防止するために設置した、固定施設(ケーブリング)の点検を行いました。

縄文杉第2展望デッキ設置箇所 現地検討会

検討会を踏まえ設置箇所は今後決定する予定ですが、右(北)側から見る設置案では、また違う縄文杉の雄姿も見ることができます。

屋久島の森に眠る遺構や人々の記憶　（第１回）

ーはじめにー

柴崎　茂光（国立歴史民俗博物館研究部・准教授）

写真1　小杉谷周辺の様子（大正14年）

屋久島の国有林では、大正時代から昭和45年頃まで、森林軌道が建設され、山中には小杉谷などの林業集落も形成され、軌道を使った木材生産が盛んに行われました。写真１は、森林軌道が敷設された直後の山中の様子を写しています。今から90年ほど前の屋久島で、どれだけ大きな林野開発が行われたかを、この写真は物語っています。そして、最大の林業集落であった小杉谷では、最盛期の昭和35年頃には540名ほどの人々がいたと言われています。

しかし、森林軌道を活用した木材生産が、安房と小杉谷周辺を結んだ区間以外でも行われてきたことはあまり知られていません。宮之浦川、永田川、黒味川沿いにも軌道は建設されました。宮之浦川の上流域には、「官行」などと地元の人に呼ばれた林業集落もありました。

最後の林業集落である小杉谷が閉鎖されてから早45年。当時の暮しを語ることができる人々は、年々少なくなってきています。とりわけ、小杉谷以外の林業集落については、もっと早い段階（昭和20～40年頃）に閉鎖されたため、75歳以上の方々でないと、生産の仕組みなどは詳しく聞けません。

このままでは多様な林業集落の暮しが「埋もれて消えてしまう」という危機感を、私が持つようになりました。そこで、林業集落で生活をしていた人々に話をうかがいながら、その情報を参考に、山中を訪れる調査を開始しました。実際に現場を訪れると、住居跡や林業活動の跡（写真2）が多く残されていました。こうした遺構を目の当たりにすると、多くの疑問が湧きあがってきますので、里に戻ってから再び話を聞いたり、文献資料を用いたりしながら、少しずつ謎を解く作業が今も続いています。（つづく）

写真2　炭窯跡

研究映像「屋久島に眠る人々の記憶」公開

研究成果の一部を映像として収めた、「屋久島に眠る人々の記憶」を公開します（聴講は無料、事前申込が必要）。興味のある方は、ホームページ経由または往復ハガキでお申込ください。

- **と　　き**：2016年2月20日（土）
- **と こ ろ**：新宿明治安田生命ホール
- **申込方法**：
  - **■ホームページ**：国立歴史民俗博物館ホームページ→催し物→歴博フォーラム「お申し込み方法」をご覧ください。
    https://www.rekihaku.ac.jp/events/forum/index.html
  - **■往復ハガキ**：「歴博映像フォーラム10　2月20日参加希望」と明記の上、住所・氏名・ふりがな・電話番号を記入し、下記宛先にお申込ください。
    〒285-8502　千葉県佐倉市城内町117番地
    国立歴史民俗博物館広報・普及係

屋久島の植物

ヤクタネゴヨウ
（マツ科）

屋久島・種子島に固有の五葉松。屋久島では西部や南部に推定約２千本が生育している。大きな個体は幹の直径が２㍍程になる。

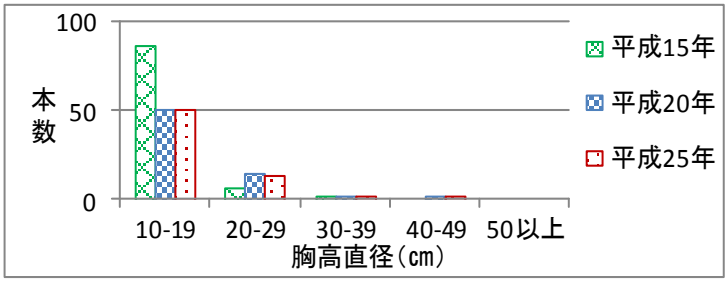
生育地の縮小、病虫害や環境変化により絶滅が懸念されることから、保護するための様々な研究や事業が行われている。

屋久島南部等の植生垂直分布調査（平成25年度）

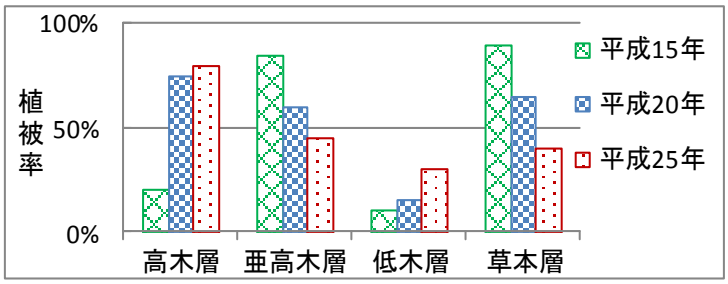
●標高 400 ㍍プロット（湯泊林道沿い）

[高木層]モクタチバナが多く、次いでスダジイ、ホソバタブ、マテバシイ、エゴノキ、ヤクシマオナガカエデが多い。個体数は少ないがクロバイ、カラスザンショウ等も出現。[亜高木層]ハドノキ、モクタチバナが多く、ホソバタブ、サルスベリ、イヌビワが続く。個体数は少ないがトキワガキ、ヤブニッケイが混生。[低木層]モクタチバナが圧倒的に多く、イヌビワ、ハドノキ、ヒサカキなども多い。[草本層]シダ類が多いのが特徴。カツモウイノデが全体的に多く、部分的にオオイワヒトデの多い場所がある。

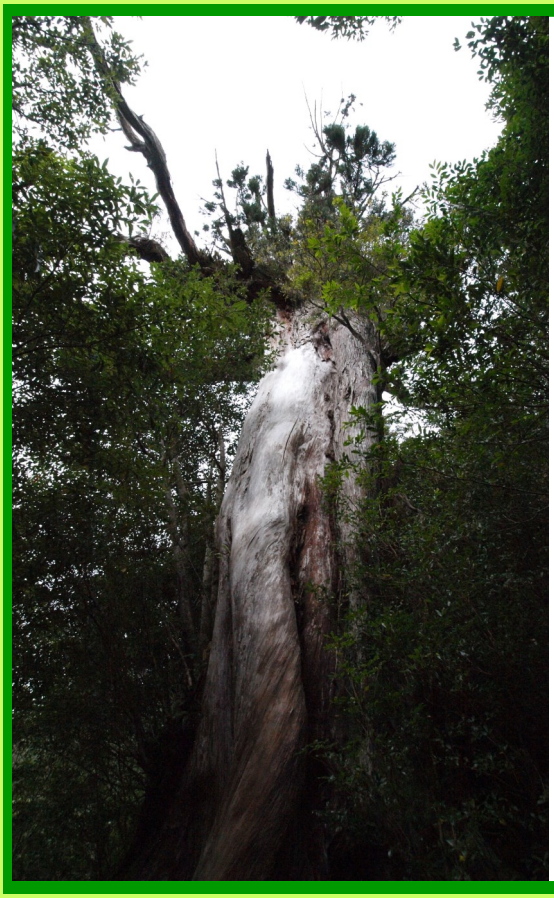
[胸高直径階別幹本数]胸高直径 10-19 ㎝の本数が平成15年度から20年度にかけて減少しているのは、幹が成長して20-29 ㎝の本数が増え、自然間引きが起きたことが予想される。旧小プロット内での全体では殆ど変化はなかった。



[階層別植被率]高木層の植被率が経年的に上がったことは、亜高木層が成長して高木層に達したと推測される。低木層の植被率についても、草本層が成長して低木層に達したと推測される。また、草本層の植被率が経年的に低下しているのは、被圧による影響以外にヤクシカの影響も考えられる。



[調査結果の概要]先駆樹種(ヤクシマオナガカエデ等)の落葉広葉樹が優占する広葉樹二次林であったが、照葉樹の優占する広葉樹二次林に遷移しつつある。高木・亜高木層の照葉樹の成長に伴い、樹冠自体はうっ閉しつつある。草本層には他のプロットには見られないシダ類も多く、植物の確認種数も多い。しかし、ヤクシカの採食圧が強くなると影響を受けていくものと考えられる。



巨樹・著名木 屋久杉

弥生杉

白谷雲水峡で最も多くの観光客が訪れ日本の巨樹巨木100選に指定されている弥生杉は、上部の枝分かれの様子や複雑な幹の形から、江戸時代に利用されず切り残された代表的な屋久杉で、回りにはイスノキなど照葉樹林に包まれている巨木です。

弥生杉にはナナカマド、サクラツツジ、アオツリバナ、タイミンタチバナ、コバンモチ、カクレミノなどが着生しています。

- 樹高：26.1㍍
- 胸高周囲：8.1㍍
- 樹齢：約3000年
- 標高：710㍍
- 場所：白谷雲水峡 弥生杉コース